

書評

O du mein Österreich

——オーストリア的なもの——

加藤 二郎

dtv のポケット版 Hans Weigel の O du mein Österreich, Versuch des Fragments einer Improvisation (一九六八年) を読んだ。読めばわかるが、これは六八年初版ではなく、現在のオーストリア共和国が主権を恢復した五年の翌年、つまりオーストリア零年に書かれたもの。外国人(ドイツ人をもちろん含む)向けのオーストリア案内書であり、ウィーンその他の都市、同国の歴史、地理、そして特に同国人の気質から生れたさまざまな現象を、即興的、断章的に(この二つも同国人の気質のあらわれ)紹介したものである。

私は、ほぼ第一次大戦前後のオーストリア文人たちを通して、私なりの同国人気質像を漠然と描いている。そしてこの像に対して、おそろく同質者に対して人が抱くであろうあの反対感情両立に悩まされている。それゆえオーストリアの新しい像を求めて、ワイゲル(一九〇八年——)のこの本を読んだのだが、——むろん私には耳新しいことをいろいろ教えてもらったが、——

——依然として私のいづく像はくずれなかった。そして私は、失望と安堵とが相半ばする溜息をついた。もともとワイゲル氏自身もこの本の中で、われわれ「オーストリア人は愛唱歌『O du mein Österreich』を聞くとき、それをファンファーレのように聞かずに長嘆息として聞くのだ」(14)と書いている。溜息をついているのは私だけではない。そしてこの言葉の下には、自画像を前にして、しかめ面をして困却している老オーストリア人の、愛すべき戯画が描かれている。つまり、オーストリア人自身も、オーストリアないしはオーストリア人に対して反対感情両立に悩んでいるわけだ。

「アメリカ人、フランス人、イギリス人、ロシア人、ポルトガル人、モナコ人などが、『アメリカ的』、『フランス的』、『イギリス的』、『ロシア的』、『ポルトガルの』、『モナコの』という場合、この形容詞には誇りと自信があり、確固とした響がある。だがオーストリア人が『オーストリア的』という場合、それは延着の列車、権能のない役人、改革が必要なのにけっして改革されない諸状態を意味する。つまり『オーストリア的』という形容詞は、オーストリア人にとっては、負の符号なのだ」(14)だが、この負の符号、国も自分も信じられぬという、この「世界のすべての国民の中で最も気高い」(ネストロイ)オーストリア的なるものは、国土が北海道程度に縮小したために生れたものではなく、旧オーストリア帝国時代に、すでに牢固としてあったものなのだ。いま、この負の符号が一行一行巧みに配された当時のオーストリア図を紹介しよう。

「その後滅亡し、称賛されてはいないが多くの点で模範的だったこの不可解な国家にも、テンポはあった。だが速度過剰ではなかった。外国にいて、この国のことを考えると、そのたびに目に浮ぶのは、徒歩旅行者や駅通馬車の時代からある白くて広い手入れのよくゆきとどいた道路の思い出であった(……)そしてなんと多彩な国柄！氷河と海、カルストとボヘミヤの麦畑、こおろぎがすだくアドリア海沿岸の夜々、そしてスロバキアの村があった(……)もちろんこの道路の上にも、自動車走っていた。だが自動車過剰ではなかった！ここでも、空の征服の準備がなされていた。が、烈しすぎるということはなかった。時おり船が南米や東アジアに向けられた。だが、あまり頻繁なことではなかった。世界市場とか世界制覇の野心はなかった。古い世界の枢軸が相交っているヨーロッパの中心に坐っていた。植民地とか海外とかいう言葉を、まだまるで試したことのないはるか遠いものでも聞くようにして聞いていた。警沢の花は開いていた。が、フランス人のように繊細すぎるということはけっしてなかった。スポーツもした。が、イギリス人ほど気狂いじみではないなかった」(ムシル、「特性のない男」)

どこも結構であるが、どこにも覇氣の感じられない国柄、さまざまな異国的風景に飾られた、のんびりとした広い国土、外向的な野心を捨て、中庸の道を心得て、安定の黄金時代を逸樂している国の姿が、見てとれる。「偉大になるのは危険なこと／立身して栄与を得るのは空しい遊び／それが与えるものは儂い影／それが奪うものは余りにも多い！」グリルパルツァーの

「夢もまた人生」の中のこの言葉が、「邯鄲の夢」の人生訓が、この東洋にも拡がっていった国土を微かに甘く浸している。だが、一つ一つに負の符号がつけられたこの国土は、またなんと全体的に力の抜けた印象を与えることか！いや、この国には特に活力が欠けていたわけではなかったのだ。ただ——そしてこのただが大問題だったのだが——多民族混合国家であったために、確固たる精神的統一も言語の統一も不可能だったのだ。そしてもし政府がこの統一を計ろうとすれば、すぐさま反撥を買い、「その一部でもつつこうとすれば、社会機構全体がそのためにほどけてしまう」(ムシル)状態にあった。そのうえ帝国内のドイツ系オーストリア人で、隣国プロシヤ・ドイツと結びつきたがり、それによりこの多民族間の微妙なバランスを崩しかねない勢力もあった。つまり、いろいろな力はあったのだが、結合した力となって働かず、逆にオーストリア対オーストリアという負の力になって、いわば三すくみの状態にあったのである。それゆえ国家は現状維持に専念し、有名な *Fortwuehler* (古いしきたりに従って、どうにかこうにかやってゆく) 主義を固守した。身動きすれば崩壊しそうなので、なるべく身動きしないようにして「ヨーロッパの中心に坐り」こみ、行動に出ず、こうして固化し硬直化していたのである。十八世紀の全盛時代に中央集権のために発達した「ヨーロッパ最良の官僚制度」(ムシル)も、身動きのできないところから、伝統、前例を墨守し、瑣事に拘泥して複雑化し、見透しのつかぬものとなり、「役人さえ、誰がどういうことに対してどのような権限をもっている

のか分らぬほど」(43)までになった。

このように固化した体制下であって、これを逸早く悟り、人間の回復とレアリテを求めて、この「冷化した四壁」(ムシル)を打ち破ろうとしてもがくのが、すぐれた詩人の姿であろう。同帝国下のブランクで生れ、そこで育ったカフカの場合は、これを打ち破ろうとしても打ち破れずに突き返される主人公の動きと、それによって対象がますますおのれを固めて独立してしまい、そのために対象「それ自体」が具現して、小説が芸術にまでたかまった例といえよう。「審判」や「城」のモチーフは、硬化した当時のオーストリア社会機構、とくに官僚制度への戦いであつたと思われる。だが小説は、これを象徴するといふよりは、むしろ審判「それ自体」、城「それ自体」を描きあげているのだ。そして「変身」では、このような社会機構下では、いっそ自分の方から虫になつた方がいいとでもいわんばかりに、主人公は巨大な甲虫と化してしまい、上役や肉親に嫌われるのである。彼のまわりの人たちは、このような体制下でも満足していたが、彼にはそれが心底やりきれないらしいのだ。それで彼は、肉親ともはや話ができぬ甲虫「それ自体」となつて独立し隔絶し、無気味な姿を曝しながら、しばらく生を保つのだ。ところで、「物それ自体」を各分野の言語を通して表現するのが、芸術家の願ひであろう。その点、「物それ自体」は人間の願望の故郷である。だが「物それ自体」は、われわれにとってあくまでも超越者なのだから、その作用はまったく無気味である。殺人的でもある。「物それ自体」を描くこととな

つたカフカの小説が、「神話」と呼ばれるのも、そのためだろう。なぜなら、神話がつあの運命の力、根源的な無気味な力が、この小説に働きかけているのだから。

さて、私がここで一見非オーストリア的と見えるカフカの作品に触れたのは、ウィーン・フィル、曠野のまったた中にある変なトンネル、山中にある孤独な駅ゼルツタール、そして蹴球チーム「アウストリア」、この四つがカフカの作品と「それ自体」という点でオーストリア的に結びつくことを、ワイゲルの本で知つたので、それを紹介したからである。だがこの三題断を成立させるためには、なおいくつかのオーストリア的なものを書いておかねばならない。

カフカは、固化した四壁と戦つた。だが固定化した体制は、安定した体制とも見えるものだ。ツヴァイクは、こう言っている。「私が育つた第一次大戦以前の時代を言い表わすべき手ごころな公式を見つけようとするならば、それは安定した黄金時代であつたと呼べば、いちばん適確ではなからうか。ほとんど千年に及ぶわれわれのオーストリア君主国では、すべてが持続のうえに築かれているように見え、国家自体がこの持続力の最上の保証人であつた」(傍点筆者)だがプロッホはこれとは反対に、みずからが過つたこの同じ時代を、Hedonismus(享楽主義)のデカデンツの時代ときめつけている。前者はハプスブルグ神話を見通せなかつた審美家の、後者はそれを見通した倫理家の、同じ社会現象の表裏を表現した言葉である。表面は安定し調和しているかに見えたが、内部は個々ばらばらで無政府状態だっ

た。表面の合理性と内部の不合理性を崩さず支えるために、国家も国民の一人々々も、いすくんでいた。もしここで「男は度胸、女は愛嬌」の粗雑な分類が許されるなら、オーストリア的なものは後者であった。いすくんで、不決断に悩んでいた。老皇帝フランソワ・ヨーゼフは、「わしはこんな目にまで遭わねばならぬのか」と、しばしば申された。ムシルは日記に書いている。「不決断——私をもっともひどく苦しめ、私をもっともひどく恐れている特性」と。そしてやがてこの不決断に踏止まることを、人間本来の品性とする態度が生れた——「変ることこそ生のいのち、踏止まることは硬直であり死である。生きんと欲する者はおのれを越えてゆかねばならぬ、変らねばならぬ、忘れねばならぬ。だがそれにも拘らず、踏止まること、忘れぬこと、操を守ることにこそ、人間の尊厳があるのだ」(ホーフマンスタール) ワイゲルは、右のホーフマンスタールのような思考態度が、オーストリア的特性だと思つて(15)つまり、普通ならば、自分の立てた前提に従つて、「それゆえ」と進めるところを、オーストリア的特性は、その前提を認めながらもそれを足場とせず、「にも拘らず」と言つて逆の立場をとることである。

さて、決断できず、女性的に多くの矛盾を抱擁して、オーストリアは諦めて踏つていた。もともとこの国には、男性的大言壮語を思む美風があった。それゆえ、この国には、チタニズムや大冒険家が生れる素地がなかった。ところで、この奥床しい美風も、内に偉大さとか力が蔵されていてこそその美風である。

ハインドルのオーストリア逸話集「偉大なことは危険なこと」(一九六九年)にのっている話によれば、オーストリアの敵将ビスマルクは側近を戒めてこう言つたという。「オーストリア人は、彼らが大きくて偉いところを見られぬようにするために、小さく見せているにすぎぬのだ」と。だがそれと同じころ、ハプスブルグ家の御用史家フリートユングは、同国民のこのさまを見て、「やつらは卑小妄想(Kleinheitswahn)にかかつておる」と腹立たしげに言つたという。卑小妄想とは誇大妄想の反対だろう。そしてこの大言壮語を思む美風から卑小妄想に至る振幅のあいだに、オーストリア独特の言語文化と感情生活が見られると思う。

まず、ワイゲルの本から、この言語文化の特殊例を一つ挙げてみる。オーストリアの新聞を見ても、また街頭を歩いてみても、オーストリア独特の縮小語尾——*lein*が、たいへん目につく。ドイツ語の縮小語尾——*lein*に相当するものだろうが、オーストリア人はあらゆる名詞に——*lein*をつけたがつていのではないかと思うほど、よく目についた。それにしても、かわいい響きの語尾、どんな名詞も舌先で丸めこんでしまうような響きの語尾である。事実オーストリア人は——もちろんこの語尾本来の機能、例えば *Häseln* は小型の *Hase* (うさぎ)、*Posten* は短い *Post* (スボン) などその機能を果す場合もあるが——大きな対象にこの語尾をつけて舌先三寸でこれを丸めこんで小さくするためか、「大きな言葉を言うのを恥じる心から、これを倭小化するためか、あるいは総体には太刀打ちでき

ないと感じて仄めかして満足するために(74)これを使うのである。だから、さままの機能を『——ent』は果すわけで、ワイゲルはその顕著な例をネストロイの言葉からひいている——

»Wir haben ein absolutes Tyranneri, wir haben ein unverantwortliches Ministerium, ein Bureaukratieer, ein Zensurerei, Staatsschuldenri, weit über unsere Kräfteri, also müssen wir auch ein Revolutioneri und durch Revolutioneri ein Konstitutioneri und endlich a Freiheitri kriegen.«上文の後段だけを拙訳してみれば、「だからむしろ革命チャンをやらかして、革命チャンで憲法チャンを、そしてつぎには自由チャンも、ものにせずばなるまいぜ」

つぎに、卑小妄想に至るまでの感情生活の例をあげてみる。たとえば、ムシルの小説「特性のない男」に出てくる「ヨーロップの運命の帰趨に影響力のある数少ない男の中の一人」であった局長トゥッチは、どんなに洗練された服装をしていたか？おのれを偉大な人物と見られぬように目立たぬようにし、三すくみの状態のために周囲のことをあれこれ勘案せねばならないために、彼の「オーストリア的洗練は、複雑に混みいった高度な趣味にふさわしく、そのまま一気にだらしなさに向う傾向を示していた」では、老ヨーゼフ皇帝のひげは？彼の側近のシユタルブルク伯爵は、この最高位者の近くでは、彼より個人的に見えないようにすることが、そのまま立派な振舞いとなり、思慮分別の当然の形式となる」と考えて、皇帝と同じひげを貯えていたが、このひげはまたこの国の「小使いや線路番なら誰

しもが生やしている」ものだったのである。彼らは明らかに皇帝のひげを模倣して彼らのひげをはやしていたのにちがいない。だがここまできると、皇帝が身を低うして彼らの臣下らの模倣をして、臣下との区別をなくし、目立たぬようにしていたと言えるほどになる。

冷化し固化した四壁の中で身を処そうとすれば、模倣、繰り返し、マニエリズム、ムシルのいう「同じことが起る」ようになる。そして同時にこのような所では、公的にまじめに arbeiten することが副次的となり、私的にまじめに spielen を楽しむことが主要事となる。あの気むずかしい顔のシュニッツラーが、「われわれは常に spielen している。それを知るものは賢い」と言った(22)そうである。またこれは有名な逸話の一つであるが——「ある偉いヴィーンの医者が、ある有名大学の正教授に招かれることとなった。そのとき彼は、そちらには彼の室内楽をするために手ごろなヴィオラ弾きがいるかどうかと尋ねた。それがいないとの返事だったので、彼は正教授の椅子を断った。彼にとっては彼の四重奏団の方が重要だったのだ」(22)

さて、公的に、規則的、計画的に arbeiten することよりも、個人的に spielen することが生活上の主要事となると、各分野でのこの spielen が、前述の模倣、繰返し、の円環を破って彼らの感情生活を充たすべく、「予測せざるもの」、「計画しきれぬもの」(25)を求める傾向が生れてこよう。こうして、即興的なこと、即興に生命を賭けるということが、オーストリア的なも

のの一つになつてくる。

私はここで、前述のカフカの問題とウィーン・フィルその他のものとの関係づけに移らうと思う。旧聞に属することだが、十数年前、戦後はじめて来日したウィーン・フィルを聞きにゆき、忘れがたい体験をしたことを、私はしばしば思い出す。世界の国々の有名な管絃楽団の演奏をいくつも見聞いたことがあるが、あれほど不思議な体験をしたことはかつてない。楽団員が指揮者の棒を全然無視していたのだ。したがって、指揮者の背後にいる聴衆も彼らには等しなかった。各楽団員は、おのれの出す音に神経を集中し、自分の出している音にのみかまけて演奏しているようだった。子供のころから、いや母親の胎内にいた時分から、いやずっとそれ以前から聞いていたもの、いまここで真剣になつて思い出し、それを「蘇生させる」(39)こと、ただそのことにのみ熱中しているようだった。彼らは、祖先を祭る彼らだけの祭りをここで催し、祖先の文化をそっくり蘇生させることによって彼ら自身も楽しみ、そしておのれ自身に立ち戻っていた。ホーフマンスタール——「オーストリアは、その音楽のなかで、はじめて精神になつた」もしこの場合、聴衆がこの祭りに参加しなかつたなら、この光景は実に無気味なものとなる。なぜなら、われわれが知る本来の——だが実はこれが本来のものであるかどうか疑わしい、むしろ常識の——オーケストラの姿とは、指揮者に統率され、指揮者の思い通りの音楽を聴衆に聞かせるものだろう。そしてウィーン・フィルの場合、この指揮者と聴衆という重要な二つの要素は現実

に在していた。だが、彼らオーケストラは、この二つのものからみずからを隔離して、はるか彼方で独立して存在していたのである。彼らからわれわれを見れば、われわれは非現実の海、われわれから彼らを見れば、彼らは非現実の島であった。無気味といえは無気味なオーケストラ「それ自体」の具現であった。だから私は、楽団の蘇生のいぶきに浸されて楽しい境地にいたが、一方甚だ無気味であった。このオーケストラ「それ自体」は、もちろんその調和の機能を果していた。だがその各構成員は、またいかにも *überindividualistisch-anarchisch* に見えた。この無政府的なものが万一音となつて飛びだしたらという不安が、私から去らなかつた。調和と崩壊の間で緊張して楽しんでるオーケストラ——そんな印象を、私はその時もたざるをえなかつた。

最近私は、前述したハインドルの本で、ウィーン・フィルが、彼らの指揮者を自分で選ぶことができるのを常に誇りにしていたことを知つた。そしてワイゲルにより、彼らが下稽古を好まぬことを知つた。そしてその好まぬ理由は、「下稽古が、彼らの出合いの新鮮さ、ま新しさを彼らから奪いかねないし、余りに瑣事に拘泥した計画によつて演奏の細部まで固定されると、音楽の秘密の領域から、単なる命令とニュアンスだけの現実界に押し出されかねないからである。もし演奏会をする以前から、演奏会がどうなりゆくかが分つてしまつていたら、演奏会の魅力などどこにあるか。そう、すべては瞬間に委ねられる、創造的な即興に委ねられるのだ。楽曲の難所は、演奏しながら

(Spielend)「克服されるのだ」(38)つまりあのときウィーン・フィルは——私はそうとは知らなかったのだが——オーストリア的特色である即興に、彼らの演奏 (spielend) を賭け (spielend) していたのだ。spielen の極意。オーストリア人が、ウィーン・フィルを自国の誇りとして領ける。彼らは、普通のオーケストラの団員のように、一人の指揮者のもとできびしい集団 Arbeit をしていたのではなかった。オーケストラ「それ自体」となって、即興演奏におのれを賭けていたのだ。そこに、私のあの恍惚と不安があったのだろう。

さて、ワイゲルは彼の案内書の中で、汽車の旅をしていると、オーストリア特有の「それ自体」にゆくりなくも遭遇して、あつと驚くさまを二つ紹介している。

その一つ——ウィーンをたつて低オーストリア州をゆくと、あたりはまったくのっぺりした瘦せた原野が続く。貧相な松がならんでいるが、森とまでには至らぬ曠野である。岡といえは、いくらか西の方のはるか彼方にあるばかりだ。このまったく平坦な曠野のまっただ中を進むうち、突如暗黒になるのだ——トンネル！「人は驚く、理解に苦しむ、窓べに急ぐ。そしてこの鉄道の建設者がレールをひどく巧妙に小さな土地の隆起のある方に敷いてゆき、この小さな隆起を是が非でも悪用してトンネルにしてしまったのだとしか、考えられない。事実巷間伝うるところによれば、フェルジナント皇帝は、トンネルが是非にも欲しいとのみ心を表明され、さもなければ一八四一年に祝われるべき南鉄道の開通式を拒否なさったとのことである。鉄道

建設史を繙くと、このトンネルは一八三一年に建設認可があり、まず大地が裁断され、それからトンネル用の管が建造され、しかるのちにその上におもむろに土が被せられたのであると、以上の事実の裏書きがなされている」(97)それゆえこのトンネルは、地勢上やむをえず作られたものではない。非実用的な即興的な Spiel であり、現実ばなれしめて童話的でもあるが、見ようによっては無気味なトンネル「それ自体」の出現であろう。

さてもう一つの「それ自体」は、今度はシュタイヤーマルク州の山中にある孤独なゼルツタール駅である。この山中のこの駅で、いつの間にか二本の鉄道が出会うのであるが、「この駅が外観ではそして最初見たところでは駅なのだが、実はこの外見が人をたぶらかす」のだそうである。「人はゼルツタール駅で乗り込むことはできない、ゼルツタール駅で降りることもできない、ただ乗り換えることができるだけだ」(116)もうおわかりと思うが、この駅には出口も入口もない。旅客はただこの駅で列車から降り、そして別の列車の来るのを待ってそれに乗り込むだけなのだ。だから常識的な駅とは違うのだ。つまり、不必要な尾端端緒を捨て去って、旅客を降ろさせ旅客を乗せるという、駅本来の機能を全うしている駅「それ自体」なのである。旅客はこのゼルツタールで列車を降りたとき、この山中の牧歌的雰囲気を楽しむことだろう。だが、列車が走り去って駅が人氣もなく深閑となり、そしてこの駅には出口も入口もなく外界から独立していることを知ったならば、つまりこれが駅

「それ自体」であったということに気付いたならば、たちまちカフカを読むときの無気味な気持ちに襲われることだろう。こういう非現実的な、どこか蒼白な「生の戯画」(116)めいたものが、オーストリアでは生れやすいのである。

紙数も尽きた。それにこの趣味的なエッセイを書き続けるのはどうかと思う。だがまだワイゲルの意を汲み尽くしていると思われぬ。彼のおす蹴球チーム「アウストリア」について、やはり少し書いておかねばならない。

このすみれ色の袖なしを着ている蹴球チームは、ウィーン・フィルとならんで、オーストリア人のファンを極度に興奮させるチームだそうである。なぜなら、この「アウストリア」は、オーストリア的なものの粋の粋であるからだ。彼ら十一人は、「魅力的で、天分が豊かで、頼りなくて、気まぐれで、勝負には負けやすく、即興的で、超個人主義的である」(50)つまり彼らは、すばらしい蹴球の演技をし、すばらしい連係動作を相互にしてみせるのだが、そのうちに敵陣に球をシュートすることが問題であることを、忘れてしまうのだ。敵を向うにまわしているながら、観衆の気持をいわば無視して演技する「アウストリア」は、やはり蹴球チーム「それ自体」と呼ぶことができよう。むろんこの国にも、普通の意味での強い蹴球チームもある。それは英語または米語の名前を冠したラビッドだ。この緑色の袖なしを着ているチーム「ラビッド」は、「アウストリア」の典型的な敵対者である。「ラビッド」は戦う、ラビッドは美しい演技を目的に従属させる。ラビッドは演技せず、合理的に、頭脳

的に、無駄することなしに働くのだ」(51)

この「ラビッド」と「アウストリア」の対照で、オーストリア的なものが、かなりはつきり浮びでてきたと思われる。ここには、明らかに二つの世界観の対立が見られる。

以上で終るが、なお蛇足をつけておく。オーストリア的なものは女性的であると言った。そしてかつてオーストリアもオーストリア人も、冷化し固化した四壁の中にいて、女性的に多くの矛盾をかかえこみ、行動に対して決断ができず、この四壁を破る挙には出ず、そのため以上のようなさまざまものを生み出した。彼らは、ナードラーが言うように「母たちの国」に住い、内面、魂、幻想界、夢の世界、非現実界(あるいは第二の現実界)、無意識界(あるいは夜の意識界)、つまり可能性をまさぐることに乗り出して、そこに生き甲斐を見出す人々を多く輩出した。こうして、「内部は海原よりも広い」(リルケ)、「魂の生体解剖者」(ムシル)などの言葉が生れ、「独白」形式(シュニツラー)や無意識下の研究あるいは劣等感情などの研究(フロイト、アドラーなど)が、諸国にさきがけて行われることになったのである。以上

なお引用文下の()にいられた数字は、ワイゲルの本のページをあらわしている。

(一橋大学助教授)